実践報告

専門職連携による実用的な教育方法を用いた保健師養成の教育心理学的効果

糸田尚史*
（名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科）

はじめに

新型コロナウィルス禍のなか、多くの講義がインターネットで映像・音声を視聴する遠隔授業であった。名寄市立大学保健福祉学部看護学科保健師課程の「対象別保健指導論Ⅱ」（履修学生 15 名）も、筆者担当部分の前半は子どもの定型発達と神経発達症（発達障害）という学修内容をビデオ録画で伝える形となった。しかし、後半は感染対策を取ることにより、実務家出身教員による対面授業も実現した。2020（令和 2）年 12 月に対面で行われた授業（講義・演習）では、児童相談所（児相）で心理判定員や判定課長を経験して現在も地域の児童家庭支援センターで こども心理士（非常勤）を続けている筆者（保健福祉学部社会保育学科所属）と、地方自治体での保健師のキャリアを有する複数の保健師課程教員（保健福祉学部看護学科所属）とが協働し、専門職連携（ＩＰＷ；Interprofessional Work）をリアルに見せる連携教育（ＩＰＥ；Interprofessional Education）による保健師養成教育を行うことができた。この教育刺激に対して受講学生から得られたコメントなどの反応から、名寄市立大学保健福祉学部におけるこうした実用的な教育方法により創発される教育心理学的な効果を見出すことができたので、このアクション・リサーチの成果を報告する。

１．問題

名寄市立大学保健福祉学部看護学科における保健師養成教育カリキュラムの「対象別保健指導論Ⅱ」の授業は、シラバスでは次のように構成されている。（1）授業のねらい：講義と演習を組み合わせながら進める。理論の習得と同時に実践技術の習得を目指す。（2）到達目標：対象別保健指導論では、ライフステージ、健康障害の種別、活動の場など様々な切り口から地域の健康問題にアプローチする手法を学ぶ。ここではライフステージ別の活動として、母子・父子保健、小児保健、思春期保健について、その法的根拠や活動実践を学び、看護職とくに保健師として 具体的な活動を展開するための基本的な能力を養う。（3）授業の計画：1 母子保健施策の変遷、 2 母子保健施策の体系、3 妊娠期の保健指導、4 乳幼児の発達支援、5 乳幼児期の予防接種、6 新生児・乳幼児訪問、7 乳児健康診査、8 幼児健康診査、9～10 演習：新生児訪問、11～12 演習：乳幼児健康診査、13 母子保健包括支援、14 児童虐待について、15 児童虐待の早期発見、16 児童虐待予防活動、17 近年の母子保健の課題、18～19 母子保健活動と関係法令、20 こどもの発達支援、21 発達障害とその理解、22 こどもの発達相談、23 発達検査について、24 家族支援について、25 演習：事例検討会、26～27 演習：発達相談の実際、28～29 演習：発達支援の実際、30 まとめ。（4）授業の留意点：遅刻・欠席をする場合は必ず連絡をすること。（5）学生に対する評価：試験 100 点により評価する。レポート等の提出物を求める場合は評価に含める。（6）教科書：(1)岡本玲子責任編集・麻原きよみ・荒木田美香子・佐伯和子編著 公衆衛生看護活動Ⅰ 医歯薬出版株式会社、(2)保健師業務要覧 第３版 日本看護協会出版会、(3)陳省仁・古塚孝・中島常安編著　糸田尚史ほか著　『子育ての発達心理学』　同文書院。（下線は筆者）

この下線部分については児相判定員出身の社会保育学科教員（筆者）と自治体保健師出身の看護学科教員

* 責任著者
糸田尚史　　itochan@nayoro.ac.jp

が実務家としての経験を活かしながら協働し、リアリティのあるロールプレイやグループワークなどの技法を用いた専門職連携教育を推進することができれば、保健師養成教育において、より教育効果の高い教育心理学的な教授法になるのではないかと考え、独自の教育方法での実践をアクション・リサーチにより試みた。

２．研究方法

15名の学生（研究協力者）には、この授業が保健師養成教育であると同時に教育方法が教育心理学的な研究の対象でもあることを説明し、オルポート（1942）のいう個人的ドキュメント（e-ラーニングや期末レポートでの記述）と授業の写真を成果物に用いることについての了承を得た。

そして、前半は受講学生に対し、講義録画をオンデマンドにより遠隔で視聴してもらい、後半はロールプレイングやグループワークをも活用した実用的な保健師教育となる対面による授業（講義・演習）を行った。

対面による授業の１講目は、保健師教員が事前に作成したオリジナル脚本をもとに、学生が発達の気になる幼児役とその保護者役を演じ［写真１］、保健師役の教員が発達相談を勧奨し、発達相談員役の筆者が１歳６か月児健康診査事後指導では「発達検査」を、３歳児健康診査事後指導では「知能検査」を実際に施行してみせ［写真２］、その心理アセスメント結果をふまえて保健師教員が親子を地域の社会資源にも繋ぐという一連の支援過程をロールプレイングで披露した。また、現在 日本で使用されている発達検査・知能検査・認知検査のほとんど全てを詳しく見てもらい、その心理検査によって子どもの発達の何がわかるのかを解説した。

対面による授業の２講目は学生全員が親子役となり、教員が地域の「遊び方教室」（要経過観察児とその保護者を対象とした支援事業）の専門指導者役を演じ、発達を促す「身体運動遊び」「手遊び」「絵本の読み聞かせ」などの子育て支援事業もロールプレイで体験してもらった［写真３］。

対面による授業の３講目も複数教員でコラボして、ピゴーズら（1942）によるインシデント・プロセス法を利用し、ホワイトボードにジェノグラム（家族関係図）を書き、造型法で家族成員や担当保健師の気持ちも体験する参加型のグループワークによる事例検討会をした［写真４］。

こうして、授業（講義・演習）を１回終えるごとに、名寄市立大学の「ムードル」（e-ラーニング・サイト）の中に開設されたインターネット上の“フォーラム”に、毎回の授業内容に対する学生からの反応をアップしてもらい、学期末には紙媒体の期末レポート課題にも様々な授業方法に対する学生側の反応を記述してもらい、録画授業と対面授業によるロールプレイングやグループワークも利用した実践的な授業の教育心理学的な効果を検討するという研究方法（アクション・リサーチ）を用いた。

［写真１］幼児健診のロールプレイ

［写真２］心理検査のロールプレイ

［写真３］遊び方教室のロールプレイ

［写真４］事例検討のグループワーク

３．結果

こうした授業方法という「刺激」に対する15名の学生（研究協力者）の全「反応」は以下の通りとなった。

１）発達相談の実際：「１歳６か月児精健での発達検査と３歳児精健での知能検査」（模擬保育室）

【学生 1】子どもが楽しく、親も検査されていると不快にならない遊びのような楽しい雰囲気をつくりあげながら、的確に診断

する技術に驚きました。子どもや親の反応に合わせて細かく発言や着眼点が入れ替わっており、見ていると簡単そうに見えてしまうけれど、様々な知識を瞬時に選択して使えるからこその言動だと感じられました。結果から、どうしてそのような言動であったのか家庭での様子を見ることに繋がり、そこから支援の必要性を保健師・心理士・家族で検討していくという流れを掴むことができました。本当に様々な親や子どもとの関係性があるため、柔軟な対応が必要だと感じました。親の不安やプライドに対して、自分自身で子どもの状態が適切に捉えられるように、時間をかけて導いていく様子がよく分かりました。【学生 2】発達検査を初めて直接見てみて、子供や親に対する言葉遣い、対応などとても勉強になりました。子供のできることを全力で褒めて、子供も親も良い気持ちになり、親の不安な気持ちが少しでも軽減される関わり方をしていることが勉強になりました。実際に使用している道具をみて、検査の方法も分かり、その後の保健師の介入など連携についても視覚で学ぶことができ、印象にも残りました。保健師と心理士の連携を学び、視点の違いから対象者との関わりや支援をより良いものにしていることなど勉強になりました。【学生 3】実際の検査の様子を見て、テストだと悟られないように、遊びの雰囲気で書き取りや発言を促したり、常に笑顔でいたりなど、その技術の高さや豊富さを感じました。また、子どもに対してだけでなく、親御さんに対しても緊張させないような雰囲気を作っていたり、安心できる声かけをしたりしていました。親御さんは子どもの不十分な所や苦手な所ばかりに目が行きがちで、不安になることも多いが、専門職の人の適切な声かけやアドバイスによって育児に対する不安を解消していっていると学ぶことができました。保健師はそういった不安や引っ越してきたばかりとか 小学校に入学する兄弟がいるなどといった生活背景を心理士に伝え、より良い発達相談にしていくために連携しているのだと学びました。また、保健師は親と専門職との架け橋となる大事な役割を果たしているということを理解することができました。【学生 4】健診やそこから精密健康診査への導入では、親に過度な不安を与えないような言葉かけが重要だと学びました。精密健康診査では遊びを通して子どもの発達を確認することがわかりました。先生と子どもの関わりを見ていて（検査）道具で遊ぶことそのものも面白そうと感じましたが、子どもの一つひとつの言動を認めて褒める場面が多く、子どもにとって成功経験を積める機会にもなっていたと感じました。また、親にできていること、まだ苦手なことを説明する場面では、今後の展望を含めて話をすることで、不安の緩和や必要な支援の導入を図りやすいと感じました。使われるスケールは対象の年齢や、発達のどの部分をみたいかによって選択することがわかりました。【学生 5】現場で行われていることを直接見ることができて本当に貴重な体験ができました。子どもに対しての接し方はもちろん、親に対しての声のかけ方など学ぶことがたくさんあり、声かけや雰囲気作りはとても大切であると学ぶことができました。【学生 6】発達検査を行うまでの流れと具体的にどのように発達検査が行われているのかを実際に見ることができ、とても勉強になりました。発達検査というと“テストする”という印象を与えて不安を感じさせてしまうため、「発達の専門の方に相談してみませんか」というように提案することで発達検査を受けることに対するハードルが下がるのだとわかりました。先生の話し方や声がけなど、子どもはもちろん親も安心してもらえるような関わり方がすごいなと感じました。発達検査はできていないことだけでなく、気づいていないけれど実はできていたことを知れるきっかけにもなるのだと感じました。【学生 7】発達検査では、発達検査とは言わずに「子どもと専門員で遊んでもらい、その様子を見させていただく」などの言い方をしており、知能テストなどのように捉えられないような工夫をしていたり、子どものできていないこともできていることを土台に、これからの発達の希望について話すことで、不安の軽減をはかっており、子供のことだけではなく親の気持ちのケアも行なっていることがわかりました。心理士からは専門的な知識を用いた検査結果を、保健師からは子どもとその家族、生活環境などの情報をお互いに提供し、共有することで対象者の地域や生活方法に合った今後の方針などを提供しており、保健師と心理士との連携について学ぶことができました。【学生 8】臨床に近い形での健診の様子を見ることができ、発達相談の実際を知ることができました。また、先生の技術に感動し、子どもも親も安心して検査が受けられるような環境づくりだったり、声掛けだったりが経験や人柄からくる話しかたなのかなと感じました。また、実際に使っているスケールや検査シートなどをみられて、様々な特徴が個々にあることがわかりました。そういったものの特徴を捉え、向き不向きを理解したうえでうまく活用することが大切なのだなと感じました。【学生 9】心理士は元々興味がある職種だったこともあり、保健師とのかかわりや、健診の様子を見ることができてとても良い機会となりました。検査とは言わずに余計な緊張感を与えないようにしたり、子どもの興味を上手く惹きつけるような技術が素晴らしいなと思いました。【学生 10】発達相談の実際をみて、子供の遊びや やる気を阻害しない声かけや 診断を行っており、先生の技術の高さに驚きました。また、お母さんへの説明の際も「これは良くできていますね」など、マイナスのことだけでは

なくプラスのことをたくさん伝えており、子供の成長を確かめることのできる場としても大きな役割を果たしているのだと思いました。子供の成長は元々のものだけでなく兄弟の有無や生活環境などにも左右されることがわかりました。特に動画ばかり見ている子供の言葉の成長が遅いというのは驚きました。保健師は生活を見て、手助けしていくのが大切だと思いました。【学生11】発達検査と聞くと「やはり検査されるのか」というイメージになりますが、今回のロールプレイを見たことにより、楽しく遊びの中で発達状況を見ていくということが理解でき、具体的なイメージを持つことができました。ロールプレイでは、沈黙を作ることなく常に楽しい空間を作り出す技術、親を不安にさせないような話術などに触れることができ、貴重な体験をすることができたと感じました。様々な技術を駆使している様子を直接見たことで、改めて技術の大切さに気づかされました。また、保健師と心理士が連携し、視点の違いを共有することで、より多方面からアセスメントできるということも学ぶことができました。【学生12】ロールプレイで私は子ども役をやり、発達診査を行いながら母親に説明したり、子どもの力を引き出すような声掛けを行うといった先生の技術を体感することができました。少し発達の遅れがみられているところも母親が育児に対して自信を失ったりしないように、できていることや潜在的な力を肯定したうえで、事実としてしっかり説明していることがわかりました。保健師は子どもの発達の状態の結果を得て、生活の中でその原因や関連要因を見つけ、長期的に関わっていくことができる職種であるということを改めて感じました。あまり結果が良くない場合でも、今後のかかわり方などを具体的に説明・話し合うことで、家族が結果に落ち込むのではなく、先を見ることができるように促しているのが印象的でした。また、長期間関わることでその家族や親を理解し、それぞれのキャパシティにあった配慮などもでき、一般的な育児の型に捉われることなく個別的な支援ができると感じました。【学生13】実際の検査の仕方を見ることができて、実施している状況をイメージすることができた。子供が楽しみながら必要な項目を検査できるように楽しい雰囲気で行ったり、笑顔で行うことで「いい自分」で実施できるのだと学んだ。親は子供の発達状況が順調なのか、育児の方法が間違っているのかなどに不安を感じる人も多いと思うが、自信を失わせないような声かけや、できていることを褒めるなどすることで、いい雰囲気で行えるのだと学んだ。できないことを探すのではなく、できていることを褒めていくことで自信もつき、他のことができるようになるきっかけにもつながると思うので、声かけの仕方を考えられると良いなと感じた。【学生14】子どもが楽しく遊びながら、検査を受けられる雰囲気づくりや、親が検査をテストとして身構えてしまうことがないような説明の仕方など、発達検査の実施には様々な配慮と工夫がなされていると感じました。検査実施中も、単にできるかできないかを確認するのではなく、子どもの反応に応じた声かけをすることで子どもの緊張をほぐしたり、傍にいる家族へも声かけすることで不安を軽減させたりするなど、重要な技術が数多くあったと感じました。ロールプレイを通して、保健師は、子ども・家族を発達検査に繋げるとともに、訪問などの関わりを通して、普段の生活の様子や生活背景から発達に関わる要因を見いだす役割を担っていると感じました。保健師と心理士の連携を目にすることができ、学びになりました。【学生15】発達検査では子どもと遊びながら楽しく発達の段階を確認するものであることが、実際にロールプレイを見てわかりました。子どものできているところやまだできていないところを母親と確認し、母親が子どもの発達について過剰な心配をしないよう母親にも話しかけながら行っている様子を見て、子どもだけでなく母親の精神的なケアも同時に行っていることがわかりました。保健師と心理士、それぞれの視点から子どもと母親に対する支援方法を話し合い、連携することで個別的な援助につながることがわかり、学びとなりました。

２）発達支援の実際：「遊び方教室」（表現演習室）

【学生1】子育て支援の様子を掴むことができました。自分が小さい頃に参加していた時は、交流の場が嫌いで泣いていたなぁと思い出しました。ただ、それも刺激となっていたこと、今となっては当たり前の動作であっても子どもにとっては体を動かし、見て、聞いて得るものはとても大きいのだと分かりました。赤ちゃん言葉やオノマトペの使用に対する世間の考えも時代により変容していることも分かりました。親がＳＮＳや偏った知識に囚われないように話をしていく関わりも大切だと感じました。読み聞かせは大人でも楽しい内容で、絵も可愛くて、方言も学べて素敵だと感じました。実家で小さい時に読んでいた絵本を思い出して見たくなり、新しい絵本も欲しくなりました。子育て支援は実際に内容を知った上で、親御さんに自信を持って勧めることができるなと感じました。【学生2】遊び方教室で親と子供が一緒になって楽しむことができ、親同士、子供同士の交流の場にもなっていることが分かりました。実際に体験してみて、私自身も楽しむことができたのと、自分が親になって参加してみたいなとも思いました。絵本の読み聞かせでは、声のトーンや大きさなど、場面場面によって変えて、大人も子供も引き寄せられる

なと思いました。初めて見た絵本ばかりで、方言のある絵本があることを初めて知りました。また、方言を用いたことによって色んな人が手に取っている絵本もあり、他にどんな絵本があるのかも気になりました。絵本の読み聞かせは、恥ずかしがらずにやることがとても大切だと思うので、私も頑張りたいと思います。【学生 3】遊び方教室は、子ども達同士の交流や身体を動かす場となるだけでなく、手をつないで一緒に楽しんだりすることで親子の関係性を強いものにしていく場でもあると学びました。また、親同士での情報共有や相談できる場でもあると感じました。先生方の読み聞かせを受けて、子どもの頃、読み聞かせがある日はその時間が楽しみで、1 日中そわそわしていたのを思い出しました。成長した今でも本を読んでもらうということはとても楽しいことだと思いました。遊び方教室では、子ども達が楽しむ場であるだけでなく、親御さんに対して「育児は楽しむことが大事」と伝える場でもあるのではと考えました。楽しむことを伝えるためには、保健師も一生懸命楽しむことが大事だとわかりました。【学生 4】遊び方教室では、子どもも親も楽しめるプログラムが行われ、親同士・子ども同士が交流を深める場にもなっていることがわかりました。ほかの親子がどのように遊んでいるかを見ることができ、自分が子どもとどう関わるか学び、検討する機会にもなっていると感じました。また、遊びを体験してみて、自分が幼い頃に経験した遊びを思い出し、あれは楽しかったから子どもともやってみたいな、あの本 私も好きだったな、などと感じて親の過去の経験も子どもとの遊びに生かされるのかなと思いました。【学生 5】親子で参加することで、他の親子がどのように子どもと関わっているか学ぶ機会になったり、自分の子供がどこまで動くことができるか知る機会になったり、一緒に来た兄弟は保健師とともに参加して楽しむことができるなど親にも子どもにもメリットが大きいと感じました。絵本の読み聞かせを聞いて、方言で書かれていたり、音だけなのに面白かったり、大人になった私たちでも楽しむことができて絵本はすごいなと思いました。【学生 6】遊び方教室は体を動かしたり声を出すなどの“動の遊び”、読み聞かせなどの“静の遊び”を組み合わせて行っているのだとわかりました。実際に体験してみて、最初は動きがぎこちなかったのですが、先生の話し方や声がけなどが非常に楽しそうな雰囲気だったため、徐々に動きが大きくなり、楽しむことができました。このような大人も子どもも楽しめる雰囲気づくりが非常に大切で、大人が楽しむことで子どもも一緒に楽しめるのではないかと感じました。また、遊び方教室などは子どもの交流だけでなく、親同士の交流の場ともなるのだとわかりました。【学生 7】子供支援センターなどで実際にどのようなことを行っているのかを知ることができました。兄弟も保健師やほかの職員などと一緒に行うことができ、気軽に参加することができ、ほかの子供たちとの交流の機会があることがわかりました。本の読み聞かせでは、声の強弱や方言を用いることで本の世界観に入りやすく、楽しく見ることができました。今後、読み聞かせの機会があったら、子どもに楽しんでもらえるような読み聞かせができるように、恥ずかしがらずに頑張りたいと思います。【学生 8】親子遊びの会などで実際にどんなことをやっているのかを知らなかったので、その一部を知れて自分も子供ができたらそういった集会に参加したいなと感じました。また、そういった場に行くことで子供とのかかわり方が分かったり、他の母親との交流が図れるのだなと感じた。そういった機会があることを保健師が情報提供し、積極的に子供との関わりをもつ時間を作る支援をすることが大切なのだなと感じた。また初めて読み聞かせを体験し、20 歳を過ぎた今でも楽しいなと感じた。特に方言があったり、訛りがあったりすると臨場感が味わえて非常に退屈しなかった。【学生 9】子ども会でどんなことをするのか、実際に体験してみて分かりました。読み聞かせや体を使った遊びなどを行うことで一体感が出てきて、親も子も楽しめる場になるのだなと感じました。子ども会で様々な遊びを体験することで、親も家でどんな遊びをしたらいいのか学ぶ場になるのではないかなと感じました。【学生 10】発達支援と聞くと何か重苦しいものを感じてしまいましたが、楽しく遊ぶ中で子供の成長を促す機会になるということがわかりました。子供たちの成長を促す場面になるだけでなく、親同士の交流を図ることもできるため、子供も親も成長することができる場になるということがわかりました。絵本の読み聞かせでは話し方や速度、ページのめくりかたを意識することでドキドキ感があり楽しいと思いました。親が楽しむことで子供にもやってみようと思う機会にもつなげることができると思いました。【学生 11】先生方の読み聞かせを体験し、気づかないうちに絵本の世界に引き込まれていて自分でも驚きました。読み聞かせる際の声の大きさやトーン、イントネーションなども工夫することで、こんなにも人を引き込ませることができるのだと実感し、自分もできるようになりたいと思いました。円になって身体を動かす際には、初めは恥ずかしさがありましたが、最終的には楽しく身体も温まっていて、楽しい雰囲気の中で遊びを覚えることの大切さを学ぶことができました。【学生 12】親子の場での読み聞かせは、親子で物語を楽しむことはもちろん、子どもに読んであげたいけど どのような本が良いのかわからない、どう読んだらいいのかわからないといった両親が行動に移すきっかけになるものだと感じました。だか

らこそ、参加の主体となる職員が全力で動き、本を読み、楽しむ様子を見せることも重要な役割であると思いました。このような会と親子を保健師が繋げ、必要であれば一緒に参加することで親同士の交流を深めたり、子育てのヒントを得たりすることができ、仲介役であり相談役であるという保健師の役割を改めて感じました。【学生 13】あそび教室で実際にどのような遊びをしているのか理解することができた。今回は子供がいなくてエアーでやったが、それでも楽しめたので実際に子供がいればもっと楽しいのだろうと感じた。大人も子供も楽しめるので、いい機会になるし、次回も参加しようという気持ちになるのかなと感じた。また、子供は多くの人と関わることで刺激がもらえ、大人も親同士でコミュニティができるなどの利点もあるのだと学んだ。【学生 14】遊び方教室を体験してみて、子どもが楽しく身体を動かしながら、遊びを通して学ぶことを支援していると感じました。また、遊び方教室では、子ども同士の交流だけでなく、親同士の繋がりも生まれるという利点があるとわかりました。兄弟も一緒に連れてきて遊ぶことができるという点からも、親が安心して利用できると思いました。親子と一緒に遊びに参加する保健師などが実際に楽しむことで、親子が同様に楽しめるような雰囲気づくりをすることも大切だと感じました。絵本の読み聞かせでは、方言は聞き慣れない言葉遣いやイントネーションが多いため、子どもたちにとっても新鮮で面白いと思いました。また、親自身が楽しく感じられることで、自分も読み聞かせをしてみようと思うきっかけになると感じました。【学生 15】いままでは子育て支援の具体的な活動内容があまりわからなかったのですが、今回の演習で雰囲気や活動内容がわかりました。子育て支援に参加することで、母親同士の交流の場となったり、他の家族の子どもとの関わり方がわかるなどの機会となることもわかりました。保健師はそのような場について情報提供を行い、参加を促したり、場合によっては対象者と日にちを合わせて一緒に参加することが大切であることがわかりました。絵本の読み聞かせでは私たちでも聞いて楽しいものがあることがわかりました。先生方の絵本を読む技術の高さにも感動しました。

３）ジェノグラムと造形法も用いたインシデント・プロセス法による「事例検討会」（地域ケア実習室）

【学生 1】対象者の気持ちを推し量りつつ、支援のために情報を集めるのはとても難しいと思いました。訪問をしても距離があっては生活をより深く知ることはできず、必要な支援に繋ぐためにはめげずに努力する必要があるとよく分かりました。対象者をよく知る人から情報を得てアプローチの仕方を変えるなど、工夫も大切だと感じました。家族関係の実演で、最初は立ち位置で何が分かるのだろうと思ったのですが、興味・関心の方向が分かったり、そのままの位置だと生じてしまう気持ちのすれ違いなどを検討することができ、面白かったです。生活環境は知的能力や育った環境により本当に様々であると痛感しました。また、それが当事者にとっては当たり前のことであることに気づき、その立場に立って考え得る視点をみていく必要があると分かりました。【学生 2】一つの事例に対して、みんなと話し合い、今後どんな可能性があるかを考えるのが楽しかったです。実際に保健師になると、様々な事例があり、実際に関わりを持っていく中で知ることもあれば、関わり方次第では知ることができないこともあり、保健師の関わり方が大切になってくるなと思いました。子供を実演してみて、子供から見る周りの環境がよく分かり勉強になりました。この方法がとても新鮮で印象に残りました。対象者の生活環境と自分の生活環境が違い、私自身の当たり前は通用せず、それぞれの家庭での当たり前があり、それを受け入れることが大切であると学びました。こちらが受け入れることで、心を開いてくれるのだと学び、保健師になってもこの考え方を忘れずに頑張りたいと思います。【学生 3】事例検討を通して、その人を取り巻く全ての環境に目を向けて、その人を色々な角度から捉えることが大事であると改めて理解しました。みんなで話し合い、自分じゃ気づけないような角度の意見も聞くことができて、様々な人と検討することの重要性を学びました。1 人でじっくり考えてみるのもよいが、他の人の意見を聞いたり実演したりすることで見えてくることが沢山あるとわかりました。家族同士の関係性やそれぞれの思いなど、少しの介入では見えてこないことも沢山あると学び、その人をよく知る人は誰か、近い存在は誰かなどを見極めて適切に連携・介入をしていくことが大事だと理解しました。【学生 4】実演することで、視覚的に関係性を捉えるという事例検討はこれまで経験したことがなく、興味深いと感じました。情報提供やディスカッションの段階で明らかにされていなかったことも、実演時に主観・客観的な視点で分析できるところがあり、面白いと感じました。また、家族員だけでなく、それに関わる保健師の距離感・受け止めも重要であることを学びました。保健師は様々な家族の在り方・考え方があることを受け入れ、保健師が主観で「大変」と思うのではなく、家族にとっての課題を明確にし、必要な支援を検討することが重要だと分かりました。【学生 5】ライブで事例検討をするというのは、不思議な感覚でしたが、最初から情報が全て出ている状態じゃないため、確認したい情報について、たくさん頭を使って考えることができたような気がしました。家族の関係を目で見え

るようにすることによって、より家族間の距離について理解することができ、目でみて考えるということも大切であると思いました。【学生 6】今回の事例検討を通して、ホワイトボード上だけでなく、ロールプレイにより立体的に家族関係を示すことで、より正確に関係性を捉えることができるのだとわかりました。また、立体的に示すことで理想の立ち位置にするにはどこへ介入が必要となるのかが分かりやすかったです。家族だけでなく、保健師と家族の距離も大切で、家族との距離が遠いことで上手く受け入れてもらえなかったり、介入できない場合もあるのだとわかりました。【学生 7】実演することで、親や祖父母、きょうだいは子供への関心があるのか、ない場合には何に関心があるのかなどの家族関係がより捉えやすくなったように感じました。自分と考えが異なっていたり、世間的には認められない生活や子育てをしている場合でも、その家族の形を受け入れ、その家族にとって効果的な支援を考えていく必要があると感じました。また、今回の事例では子供について詳しいのは保育士であり、保育士との連携が必要な状況についても学ぶことができました。【学生 8】誰かが事例を提示してそれについてみんなで話し合うことで様々な視点からの介入方法が窺えて非常に楽しかったです。また、最後の方に家族関係を視覚的に表現する方法は新鮮で、図式的に表すだけでなく、人を使って目線や立ち位置で関係性を表現することで見えてくる世界がまた変わってくるのだとわかり、非常に楽しかったです。また、やりたいです。【学生 9】事例検討で行った投影法は、立ち位置だけで人との繋がりや関係性がよく分かって、とても面白かったです。今回の事例の家族も複雑でしたが、保健師が介入しないといけないということはこのくらいか、もっと複雑なケースなのだろうなと感じました。まずは保健師がその現状を受け入れることが大切だと学びました。【学生 10】実際に事例検討を行うことで、その人の現状や経緯を把握することができ、深い学びを得ることができました。家族の関係性を見える化することで実際の家族の状態や思いを考えることができ、保健師がどのように介入するかを考えることができました。実際に保健師がどのように関わっていくのかを考えることは難しかったですが、その分深くまで学ぶことができて楽しかったです。【学生 11】ホワイトボードに示された図や情報から予測できることと実演することとでは見えてくることが大きく違うことに驚きました。事例検討を通して、情報のみより実際に訪問したり話を聞いたりなど直接的に関わりを持つことで、さらに見えてくることが違ってくるのだろうと考えることができました。また、支援をしていくためにはまず在り方を受け入れるということが大切であると学びました。一般的な考えでアセスメントするのではなく、人それぞれの生活があることを受け入れて、その人にはどのような支援が必要であるのかを検討していくことが重要だと感じることができました。【学生 12】実演することで、ホワイトボード上の情報では感じられなかった家族間のなんともいえない関係性を体感することができ、驚きました。最後に理想的なものとしてみんなで位置や向きを調整していき、それを目指して支援を行うことがいちばんだと思いましたが、家族がそれを受け入れてくれるかは難しく、家族への介入の複雑さを実感した気分になりました。保健師が家族の在り方を受け入れられないことで支援しにくくなるということに「なるほどな」と思いました。自分の理解の範囲内に収まらない事例に対しても「そういう考え方もあるのだ」とわり切って、その家族の中の「普通」を尊重し、効果的な支援に繋げていく必要があると学びました。【学生 13】事例検討は今回初めて行ったが、複数人で事例について考えることで自分 1 人では気づけなかった視点で見ることができたり、新たな学びにつながるため楽しく学ぶことができた。また、実演することでそれぞれの登場人物がどのようなことを考えているのか理解することにつながった。自分の常識では信じられないようなことに今後出会うかもしれないが、自分なりに考えて対象者たちに必要な関わりをしていけるようになりたいと感じた。考え方や生活は人それぞれ違うので、自分が全て正しいとは考えず柔軟に対応したい。【学生 14】事例検討では、得られている情報から対象者の生活状況や置かれている環境をイメージし、それらのことからどのような可能性が考えられるかを考察することが大切だと学びました。家族の関係性を距離感や身体の向きによって示す方法は、家族関係を視覚的に捉えることができ、興味深かったです。実演者たちの感想が、自分が周囲から見て感じたこととは、また違った視点のものが多かったことも印象的でした。対象者との間に信頼関係を築くためには、自分の価値観や当たり前に囚われないことが大切だと学びました。自分とは異なる考え方でも、対象者や家族にとっての当たり前を受け止められることが大切だと思いました。また、そのためには、様々な考え方や価値観に触れ、自分の視野を広げておくことが重要になると感じました。【学生 15】事例検討では、みんなで話し合うことで自分では気づくことができなかった問題にも目を向けることができるようになり、学びが多かったです。実演することで、家族の関係性がわかりやすくなり、母親、祖父母、姉妹がどのような関係にあるのか、子どもに対して目を向けているのかが想像しやすくなりました。自分の想像を超えた複雑な家族関係もあるのだと今回の演習でわかりました。今後、保健師としてそのような家族と関わる機会があったときには、

当事者にとっては今の形が当たり前となっているので、その形を否定せずに受け入れ、どのような支援を行えばよりよい生活ができるのかを考えていける保健師になりたいと強く思いました。

４．考察

１）座学による遠隔講義（ビデオ録画の視聴によるオンデマンド授業）

前半においてオンデマンドで実施した筆者担当部分の録画授業では、シラバスに示されている乳幼児の発達支援、幼児健康診査、児童虐待（いわゆる第４の発達障害）、こどもの発達支援、発達障害とその理解、こどもの発達相談、発達検査、家族支援などについて学修を促した。将来、地域の保健師として関わることになる乳幼児健診、家庭支援、関係機関との多職種連携（cooperating with other professionals）といった業務に必要な子ども家庭の臨床発達心理学的な基礎知識やチェックポイントなどをパワーポイントのスライドにより解説した。スライド資料は事前に紙媒体で配布するとともにインターネット上にもアップした。使用したスライド数は、定型発達児に関する「子どもの発達の観察と支援（１）」で 147 枚、神経発達症（発達障害）児に関する「子どもの発達の観察と支援（２）」で 307 枚、合計 454 枚であった。スライド１枚毎に、文字だけでなく関連する図・表・イラスト・マンガ・写真・動画なども最大限付加することを強く意識した結果、文字だけのスライド数は４枚（0.9%）にとどまり、それ以外の 450 枚（99.1%）のスライドは解りやすいビジュアルな学修媒体として示すことができた。学期末に提出されたレポートからは、「オンデマンド授業では、初めに資料が多く、びっくりしたのですが、写真やイラスト、文献からの図が多く作成されていたため、想像がしやすく、授業をききながら“なるほど。”と思うことが多かった」（学生 5）、「授業は、スライドに絵や写真などが多く、マンガで具体的に説明してくださっていたので内容が理解しやすかったです。楽しく授業を受けることができました」（学生 6）などの反応が得られた。これらの反応からも実務家を育成するための現代的な専門職教育において、サーウィックら（2015）、やまだ（2018）、やまだ（2019）、サトウ（2020）のいう“グラフィック”な教材や“ビジュアル”な教材による講義（演習）は重要であると考えられる。

また、「多くの事例や動物との比較、実験に基づいた理論などを使用しての説明により、わかりやすく子どもの発達の観察と支援について学べたと感じる」（学生 1）、「オンデマンドによる授業では、先生自身の話を例にあげてくれたり、事例などからとてもイメージがつきやすい授業だと感じた。子どもの発達について、歴史から現在にいたるまでの経過、その時代で問題とされてきたことなどについて詳しい内容まで学ぶことができた。発達障害についても詳しく知ることができ、イメージもつきやすい授業だと感じた」（学生 2）、「先生の経験の１つひとつが、支援に繋がっているのだなと講義を受けて感じた。それぞれのお話にエピソードを交えながら教えて下さり、とても勉強になった」（学生 3）、「オンデマンド授業でしたが、楽しく授業を受けることができました」（学生 6）、「オンデマンド授業では、難しく理解しにくいことを私たちの身近なことで喩えてくれていたため、抵抗なく理解することができ、自分の過去の経験と照らし合わせ、自分も行ってきたものが多くあることで、他の分野で習っていることよりも印象に残る講義であったと感じる。また、先生が楽しそうに説明しているため、私も明るい気分で学ぶことができたと思う」（学生 7）、「先生は、話すのが上手で、聞いていて退屈しませんでした」（学生 8）、「先生の講義を通して、子どもの発達についてよく理解することができました」（学生 10）、「オンデマンド授業では、先生のパワフルで相手を惹きつける説明によって、遠隔であっても、楽しく講義を受けることができました。ヒトと関わる職業を目指す者として、言葉選びや説明方法の工夫点を先生から吸収したいと思った」（学生 11）、「難しい部分では親しみのあるものにたとえて話をしてもらえて大変わかりやすかった」（学生 13）、「12 回の講義はオンデマンドの形となったが、講義内容に関する具体例やエピソードが多くあったためわかりやすく、楽しく視聴することができた」（学生 14）、「子どもの発達・成長にかかわる理論や考え方を身近なわかりやすい喩えを用いながら説明していたので納得することができ、理解できました。毎回の授業の内容がおもしろく、わかりやすくて学びがた

くさんあったので楽しかったです」（学生 15）などの反応からは、一方的となりがちなオンデマンドでの遠隔講義でも工夫次第で意欲的に視聴のできる楽しくておもしろい授業にすることも可能になると考えられる。

なお、「どの授業も、他の学生の意見を知ることができ、他者の着眼点を知り、考えることでも学びを深めることができたと感じる」（学生 1）、「ムードル上で感想を共有することで、自分にはなかった新たな気づきや学びを得ることができた。楽しい講義をありがとうございました」（学生 14）などの反応からは、e-ラーニング（ムードル）での相互に閲覧可能なコメントなどの共有が協働学修では有効となることもわかった。

２）対面による演習（看護学科教員と社会保育学科教員とによる専門職連携教育）

後半において対面で実施した演習授業では、前半のオンデマンド授業で講じた学修内容と関連づけながら、看護学科保健師課程の複数教員と連携・協働し、「演習：乳幼児健康診査」「演習：発達相談の実際」「演習：発達支援の実際」「演習：事例検討会」などについて疑似的な体験と学びを促し、最後はすべての教員が一人ずつ講評を述べるという形で全体を振り返り、学修ポイントの定着をはかる「まとめ」を行った。

（１）対面による発達検査・知能検査場面のロールプレイ：（社会保育学科）模擬保育室

対面での１講目は１歳６か月児精密健康診査での発達検査と３歳児精密健康診査での知能検査を中心とする「発達相談の実際」とし、社会保育学科の「模擬保育室」を使用した。「模擬保育室」は保育所・認定こども園・幼稚園・地域子育て支援センターなどの施設を模して作られた最新の教室であり、児童相談所の巡回児童相談（巡相）などで相談会場となる空間とも類似性がある。こうした環境を使用することにより、巡回相談などでの発達相談場面に同席した保健師の認知や感情も疑似体験されやすく、児童心理司・児童福祉司・保育士・教諭・諸相談員などとの専門職連携についてもイメージされやすいといった効果が期待できる。

保健師教員が学生に母親役や発達に遅れのある子ども役を依頼し、事前に保健師教員によって執筆された健診での遣り取りのシナリオをもとに、学生達にロールプレイで演じてもらう。脚本では、子どもの言語発達や精神発達に遅れがあるという設定で、そのことを心配する母親は健診担当保健師役教員から勧奨され、母親役・子役・保健師役の学生とで心理職（筆者）の発達相談コーナーにやってくるというストーリー展開となっている。母親役の学生には台本を読みながら発達に遅れのある子の母親という演技をしてもらうが、言語発達遅滞があるとされる子ども役には台詞がなく、子ども役の学生には１歳半児健診の精密健康診査ではまだ表出言語はほとんどないけれども積木を上に少し積むくらいならできるという発達レベルで演じて欲しいと伝える。３歳児健診の精密健康診査では表出言語は少ないけれど視覚－運動的な動作性課題は年齢相応の感じでできるという発達レベルの子どもを演じてくださいと依頼する。子ども役の学生には事前の練習なしに、学生なりの判断に基づいたアドリブの演技で心理職（筆者）が実施する発達検査・知能検査をぶっつけ本番で受けてもらう。ライブ感満載で発達検査・知能検査を進め、得られた結果と所見は保護者役学生に話し、保健師役教員にも伝え、親子を再び保健師のもとへと導き、保健師からは今後どのような地域資源の活用がよいのかについての見通しなども助言するという一連のソーシャルワーク過程が演じられていく。

こうした教育方法を受講学生全員に体験してもらうことにより、文献や座学だけでは得られないリアルな学修が促進されることは、受講学生の期末レポートにおける次のような反応から窺われる。「養育者にも子どもにも検査されているという不快感を与えずに楽しい雰囲気を作りながら的確に診断する技術に驚いた」（学生 1）、「検査で、子どもと遊びながら楽しく発達の段階を確認することが、実際のロールプレイを見て分かった」（学生 2）、「座学では学ぶことができないような内容を学ぶことができた。検査の様子を体験してみて、保健師や心理士の仕事内容や役割を知ることができ、また、支援を受ける親子の気持ちも学ぶことができた。特に、保健師は心理士などと親子をつなぐ橋渡しの役割を果たしていた印象であった」（学生 3）、「発達検査デモンストレーションでの先生と子ども役の遊びは終始とても楽しそうだと感じ、子どもの言動に対する反応や、リラックスして遊べる声かけ・雰囲気づくりが勉強になった」（学生 4）、「実際に発達検査を行う様子をみせてもらったことで、想像ではなく目でしっかり確認することができて、わかりやすかったです。最近

は保健師が（検査場面に）入れないことが多いそうなので今回、学生をしている間に見られて本当に良かったです。子どもの検査で子どもばかりに目が行かないように、親にも声をかけることによって親の不安な気持ちを軽減することにつながっていると思いました。実際に子ども役をやらせてもらった際にとても楽しく検査を受けられたので、表情や声かけ、声のトーンはとても重要であると思いました」（学生5）、「発達相談では、１歳６か月児と３歳児を対象に、ロールプレイにより、臨床に近い状況での健診の様子を見ることができ、子どもは楽しく、親もテストされていると不快にならないよう遊びのような楽しい雰囲気をつくり、話し方や声がけなど子どもも親も安心して検査が受けられるように様々な工夫がされているのだと学ぶことができました」（学生 6）、「保健師と心理士との連携について学ぶことができてとても興味深かった」（学生7）、「検査の際には子どもの発達や性格などから、適した検査方法やスケールがあるということがわかり、勉強になりました。子どもや親を不安にさせないためにも表現方法や検査結果の伝え方、検査中の声かけなど、先生の技術が垣間見える演習を実際に受けることができて非常に良い学びになりました」（学生8）、「健診の様子を見ることができてとても良い機会となった。子どもには検査と言わず、余計な緊張感を与えないようにしたり、子どもの興味を上手く惹きつけるような遊び方、間の取り方や声のトーンなどのコミュニケーション技術が素晴らしいなと感じた。親に対しても、自分の子どもがテストをされているという印象を与えないように、専門の方に相談という形で行うことで発達検査を受けることへの抵抗を感じさせない工夫になっていると気づいた。子どもができたことをたくさん褒めることで、子どもの成功体験になり、親も“専門の人に褒めてもらった”という自信につながるのだなと感じた」（学生9）、「子どもの発達を見るテストでは良いところや上手にできているところを一緒に来た親に伝えながら、子どもも楽しみながら行っており、自分の中では淡々と進めていくイメージがあったので、イメージとのギャップをすごく感じました。ロールプレイで母親の役をやった際に最初は自分のせいで発達が遅れているのではないかと自分を責めるようなマイナスの発言が多く、自分が悪いのだという思いがありました。しかし、テストやその結果に基づいた先生方の説明を聞いて、全ての発達が遅れている訳ではないことや、ねぎらいの言葉、支援を受けることで発達が促進される可能性があることを知ることができて、気持ちが楽になる感じがしました」（学生 10）、「発達検査の演習では、テストだと感じさせない雰囲気作りや、遊びの中で評価していく様子を見学し、技術の高さ・豊富さを感じた。子どもだけへの配慮ではなく、親に対しても不安を与えないような声かけや、子どもができたことを言葉にして褒めるといった関わりがあると気づき、技術の素晴らしさを感じた」（学生 11）、「オンデマンドの講義と対面の講義を受けることで、知識として学んだだけではイメージがつきにくい知能検査や発達検査への理解が進んだ。保健師と心理士の連携という側面もみることができ、その中で保健師は日常の生活という点に着目して話を聞き、心理士と意見交換を行っている様子が見てとれた。現在、保健師が心理検査の様子を見ることができなくなっている中で、貴重な体験だった。診断に拘ってしまうのは親で、その親のケアと同時に子どもの力を引き出す声掛けを行っている様子が見れ、理想的な関わりであると感じた。事実は事実として伝えるが、結果としてその診断結果という事実が大切なのではなく、今後どうしていくかが大切であり、家族とその子どもが前向きに捉えていけるような配慮が必要であると学んだ。実際に対象者と関わるときに留意することを知識として学んでも、実際にどのようにするのかイメージできずに困るという経験が看護においてもあったが今回は実際に見ることができ、そこから工夫点を考えることができたため、とても参考になった」（学生 12）、「実際にどのような健診を行うか見ることができ、子どもや親との接し方についても学ぶことができたため、よい機会であったと考える。健診に子どもが前向きに来られるような環境作りや声かけを行うことが、継続してもらうためには必要なのかなと考えた」（学生 13）、「発達検査の実際を自分の目で見ることができ、とても貴重な経験になった。保健師との連携の様子についても、ロールプレイを通じてイメージすることができた。先生の、子どもへの声かけや、不安を抱えている母親に対しての言葉がけに優しさをおぼえ、相手の思いを推し量り寄り添うことの大切さを感じた」（学生 14）、「特に印象

に残っているのが対面での演習でした。発達相談を臨床に近い形でみることができ、子どもとその親が楽しく、安心して検査が受けられるような環境づくりや声かけに感動しました。子どもへの関わり方、親への声のかけ方など様々な技術を実際にみて、経験や技術の大切さがわかりました。また、保健師と心理士、その他関係職種が連携し、各専門職の視点を共有することで個別性のある、より多方面からのアセスメントができ、必要な支援へとつなげることができることが学びとなりました。発達検査はできていないことを見つけるだけでなく、できると気づかなかったけれど実はできていたことを知るきっかけの場ともなることがわかりました」（学生 15）。以上の感想からも今回の教授法は心理学的に教育効果のある教育技法と考えられる。

（２）対面による発達支援事業「遊び方教室」のロールプレイ：（社会保育学科）表現演習室

対面による２講目は「発達支援の実際」とし、社会保育学科にある床が板張りの「表現演習室」を使い、「遊び方教室」を実施した。この広くて新しい教室を使用することにより、健診での要経過観察児への支援事業が疑似体験されやすく、地域子育て支援や児童発達支援の専門職などとの専門職連携（ＩＰＷ）についてもイメージしやすいなどの効果が期待できる。複数教員で「遊び方教室」の発達支援専門職役を演じ、学生達には子育て支援や発達支援を受ける親子という役割を意識したロールプレイにより、集団遊戯療法としてのムーブメント遊びや絵本の読み聞かせなどを体験してもらった。学期末レポートからは次のような反応が得られた。「みんなで輪をつくってスキップしたりジャンプをしたり、何気なく親子で参加できるレクも身体を使ってたくさんのことを学べるようになっていることに驚きました。みんなで手をつなぐと大きい円ができることなど、体を動かして学べるので楽しかったです。絵本の読み聞かせでは、大人になっても絵本って楽しめるんだなと感じました」（学生 5）、「遊び方教室では、“動”の遊びと“静”の遊びを組み合わせてうまくバランスをとっていることがわかった。子どもだけを遊ばせるのではなく、親も参加して一緒に遊ぶことで、子育てが初めての親や、家でどうやって遊んだらいいかわからない親でも、楽しんで遊び方を学べるとわかった。また、身近に一緒に遊べる子どもがいなくても、他の子どもと自分の子どもがどんなかかわりをするのかを見る良い機会にもなっていることや親同士の交流のきっかけをつくる機会にもなっているのだと感じた」（学生 9）。こうした感想からもここでの実用的な教育方法の教育心理学的な効果が見いだせる。

（３）インシデント・プロセス法と造形法による事例検討のグループワーク：（看護学科）地域ケア実習室

対面による３講目は「事例検討会」とし、看護学科の「地域ケア実習室」を使ったケース・カンファレンスを実施した。この教室を使用することにより、地域の保健センターなどでの実際の事例検討会も疑似体験されやすく、要保護児童対策地域協議会など関係者の連携の会議についてもイメージしやすいなどの効果が期待できる。複数教員で協働し、保健師教員からは、実務家時代に地域で経験した子ども家庭の支援事例について個人が特定されないよう配慮しつつ守秘義務は遵守しながら披露していただいた。筆者が「インシデント・プロセス法」など複数の事例検討法を組合せて進行役を務め、ホワイトボードにジェノグラム（家族関係図）などの情報を小出しで書き出し（２次元）、それをもとに筆者が児童相談所判定員時代に学んだ「家族造形法」によるロールプレイなどで受講学生達にはグループワークによる体験をしてもらった（３次元）。

学期末レポートからは次のような反応が得られた。「事例検討をする機会は今までなかったため、最初は戸惑いましたが、徐々に情報が増えたり、内容が整理されていき、楽しかったです。ホワイトボードにまとめた情報をロールプレイで実演して立体的に示すことでさらに関係性がわかりやすくなり、情報を整理することができるのだとわかり、おもしろかったです」（学生 6）、「事例検討では、造型法が非常に興味深かった。この立ち位置では子どもや家族のことがよく見えず外の世界ばかり見える、子育ての中心人物が誰かわからないなど、立ち位置だけで人との繋がりや関係性がよく分かって、とても面白かった」（学生 9）、「事例検討では（インシデント・プロセス法により）情報が少しずつでてくるにつれ、考えられるようになり、いい学びだったと感じた。他にも、図や示された情報から考えられることと実演してみて考えられることとでは違っていたので驚きました。情報を見てわかった気になっていたが、実際に状況を作って考えると別の見方が

できるのはおもしろいと感じた。しっかりと実際の状況を見ないとわからないこともあるのだと気づき、訪問の大切さを感じることができた」(学生 13)、「今回の演習では、ホワイトボード上での図式などの情報と、実際に立ち位置などを決めて実演してみることで事例の見え方が変わることに驚き、興味深かったです」(学生 15)。これらの学修内容も名寄市立大学での「対象別保育指導論Ⅱ」らしい連携教育の成果といえよう。

３）全体を通して：「まとめ」

こうした教育方法で専門職連携教育（ＩＰＥ）を実践することにより大きな学修効果が得られると考えられる。受講学生の反応は、「様々な考えや価値観に触れ、自分の視野を広げておくことが大切だと感じた」(学生 1)、「保健師の仕事内容だけでなく、他の専門職の仕事内容についても詳しく学ぶことができ、保健師との連携の場面を実際に目で見て学ぶことができた」(学生 2)、「他の専門職がどんな働きをしているのかを理解することで、改めて自分の専門性に誇りを持ち、役割を再認識することができると思った」(学生 3)、「保健師には、自らの価値観で相手の状況を否定せず、受け止めることが求められ、相手の価値観を知り、それに沿って状況を理解することが重要だとわかった」(学生 4)、「面白く学ぶことができました。本当にたくさんのことを学ぶことができました」(学生 5)、「実際に体験してみて、話を聞くだけでは理解しきれないことがあったり、体験することで強く印象に残ると感じました。先生の講義を受けたことで色々と体験することができてとても楽しかったです」(学生 6)、「保健師と看護師との連携については少し知識があったが、看護師以外の専門職連携との関係について学ぶことができた。今回は心理士との連携について学ぶことができ、とても興味深かった」(学生 7)、「他職種連携の一部として、先生の講義や演習があって本当に良かったです。様々な事を学ぶことができ、子どもの成長発達の観察等について、より具体的にイメージすることができるようになりました」(学生 8)、「全体を通して、普段の講義では気づかない視点から様々なことを学ぶことができ、楽しんで講義に参加することができた。保健師の魅力も再認識でき、今回学んだことを活かして保健師として働きたいと強く感じた」(学生 9)、「親の気持ちをくみとり、前向きになることができるような声のかけ方や説明ができるような保健師になりたいなと思いました」(学生 10)、「ほとんどの講義が分かりやすく、楽しく講義を受けることができた。今回、先生から学んだことをきっかけに、子どもの発達について興味が湧いた。自分も、子どもや親と上手く関われるよう、技術を高めていきたい」(学生 11)、「たびたび事例として登場した太郎（仮名）くんから、育児・子どもの成長の実際を垣間みることができた。知識として学ぶ子どもの発達と実際の発達の違いを感じた」(学生 12)、「教科書で読むだけでは頭に入ってこなかったり、難しいと感じることでも例を出してもらうことで、自分の知識にすることができた」(学生 13)、「単純に判断するのではなく、その人の考え方や行動に繋がっている生活背景・生活習慣の有無などを探り、その人に本当に必要な支援を提供できるようにすることが重要だと思った」(学生 14)、「こちらが“難しい家族だ”“かわいそうだ”などと決めつけずに、その家族にとって必要かつ効果的な支援を考えられる保健師になりたいと思いました」(学生 15) などであった。反応からは名寄市立大学保健福祉学部でのこのような授業が教育心理学的にみても意味があり、より学修効果を高める連携教育（ＩＰＥ）となっていたことがわかる。

５．結論

「対象別保健指導論Ⅱ」の専門職連携教育（ＩＰＥ）ではロールプレイングやグループワークなども導入した実践的な授業（講義・演習）からなる刺激を受講学生に対して行った。その結果、授業毎の反応や期末レポートでの反応などから、名寄市立大学保健福祉学部看護学科保健師課程方式とでも呼べるようなこうした専門職連携教育（ＩＰＥ）は心理学的にも効果のある実用的な教育技法であると考えられた。もしこのような教育方法が可能なスタッフのいる高等教育機関であるならば、現場において期待される実践力をも兼ね備えた保健師養成へと繋げることができ、普及が望まれる。保健師養成課程のある大学に、子どもの臨床心理学的なアセスメントや発達支援の技能や実務経験を有する心理職の教員がおり、保健師教員に専門職連携

（ＩＰＷ）への理解が深く、学科は違っても看護学科の講義・演習で異職種・多職種を活用してもらえるとすると教育心理学的にも有効な教育の技術・技法を取り入れた実用的な連携教育（ＩＰＥ）が可能となる。

おわりに

異職種・多職種だが医療職の範囲内での連携というありがちなパターンを越境した専門職連携（ＩＰＷ）による連携教育（ＩＰＥ）が実際に実現できた背景としては、学科こそ栄養・看護・社会福祉・社会保育の４学科であっても学部は学際的（interdisciplinary）で学科横断的な「保健福祉」の１学部しかない新しい地方公立大学だったからということもあり、こうした特色は活かし続けたい。また、筆者の心理職としての知識・技術・現場経験なども有効に活用し、保健福祉学部看護学科教員との専門職連携（ＩＰＷ）を通して名寄市立大学保健福祉学部らしい保健師養成教育を積極的に行い、名寄市立大学保健福祉学部ならではの看護学科と社会保育学科との連携・協働による専門職連携教育（ＩＰＥ）や少人数教育を推進していきたい。

謝辞

名寄市立大学保健福祉学部の特長である専門職連携教育（ＩＰＥ）を社会保育学科教員である筆者が看護学科保健師課程での授業の担当部分において実践していくにあたり、このたびの実用的な講義・演習などをいっしょに楽しくコラボレーションしてくださり、より教育効果が高まるよう きめ細やかに状況即応的な学びの協働体を構成してくださった播本雅津子教授・室矢剛志助教ほか看護学科教員のみなさまと教育心理学研究の協力者にもなってくださった保健師志望の看護学科学生のみなさまに深謝し、お礼申し上げます。

参考文献

Allport, G.W.　1942　The Use of Personal Documents in Psychological Science. Social Science Research Council.　（大場安則 訳　1970　『心理科学における個人的記録の利用法』 培風館 ／ 福岡安則 訳　2017　『質的研究法』 弘文堂）

Czerwiec, MK., Williams, I., Squier, S.M., Green, M.J., Myers, K.R., & Smith, S.T.　2015　Graphic Medicine Manifesto.　The Pennsylvania State University Press.　（小森康永・平沢慎也・安達映子・奥野光・岸本寛史・高木萌 訳　2019　『グラフィック・メディスン・マニフェスト：マンガで医療が変わる』　北大路書房）

早樫一男　2016　『対人援助職のためのジェノグラム入門：家族理解と相談援助に役立つツールの活かし方』　中央法規出版

糸田尚史　2003　「第７章　発達のつまずきと養育者・施設の役割」「第９章　福祉施設における子どもの発達」　陳省仁・古塚孝・中島常安 編　『子育ての発達心理学』　同文書院

糸田尚史　2008　「第２部 発達・知能検査 第３章 発達知能検査のポイント」「第８部 臨床心理アセスメントの事例への適用 第12章 発達障害の児童の事例」　小山充道 編　『必携 臨床心理アセスメント』　金剛出版

糸田尚史　2020　「ビジュアルなグラフィックなどによる“心理学”教育の試みと効果」　社会保育実践研究　第４巻　27-36

McGoldrick, M.　Gerson, R.& Petry, S　2008　Genograms：Assessment and Intervention, 3rd ed. Norton Professional Books.　（渋沢田鶴子 監訳　青木聡・大西真美・藪垣将 訳　2018　『ジェノグラム：家族のアセスメントと介入』　金剛出版）

Pigors, P & Pigors, F　1980　The Pigors Incident Process of Case Study.　Educational Technology Publications.　（菅祝四郎 訳　1981　『インシデント・プロセス事例研究法：管理者のケースマインドを育てる法』　産業能率大学出版部）

サトウタツヤ　2020　「心理学史におけるナラティヴの役割」　Ｎ：ナラティヴとケア　第11号　野村春夫 編　「心の科学とナラティヴ・プラクティス」　遠見書房

やまだようこ　2018　「ビジュアル・ナラティヴと何か」　Ｎ：ナラティヴとケア　第９号　やまだようこ 編　「ビジュアル・ナラティヴ―視覚イメージで語る」　遠見書房

やまだようこ　2019　「ビジュアル・ナラティブ」　サトウタツヤ・朝日秀朗・神崎真実編　『ワードマップ 質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』　新曜社

本報告の一部は、2019（令和元）年 11 月 9 日に「行動科学における基礎と臨床のリエゾン：知識を、人を、社会をつなぐ」とのテーマで開催された現代行動科学会第 36 回大会において「ケアの未来をひらくビジュアルな教育方法の実践」として発表した。また、2021（令和 3）年 1 月 22 日に発行された北都新聞（名大の時間）において「専門職協働によるロールプレイ等からの学修」として記事になっている。